

夢を見ていた。長い長い夢を。

永遠と階段を登りつづけるような、日々の夢を。

「——イリシア？」

降り注ぐ日差しが眩しくて目を開いた。

驚いた声と共に、真夏の空のように美しい水色の瞳が見える。

丸く見開いたそれは、すぐに嬉しそうに弧を描いた。

「ああ、やつと起きたんだね——おはよう、イリシア」

イリシア。そうだ、それはわたしの名前だ。

そしてここは、眠りについた時のままなら——山奥の療養所の、質素なベッドの上ではなかったか。

わたしはそこで、一生をほとんど眠って過ごすことを選んだはずだ。

「僕のかわいいイリシア。君が目覚めますのを、ずっと待っていたんだよ」

——だというのに、どうしてわたしはまた目覚め、誰かの膝の上にいるのだろうか。

魔力が制御できないので
一生眠ることにした

出来損ない聖女

ですが目が覚めたら

超成長した

幼馴染の皇子の膝の上で

花嫁修業溺愛えっち

が始まってしまいました

ろこもいっしょさき

絢辻透

「……だ、れ」

「ああ、イリシア……お水を飲もうか」

声が出ない。喉が乾燥しきっているようだった。

なぜだか痛ましそうに見つめられながら、コップを口に運ばれる。

今のわたしにはそれを飲む選択しかない。ゆっくりと傾けられ、口に入る冷たい水をこくこくと飲み下していった。無味無臭の、おそらくは普通の水だろう。

ぼんやりしていた意識が少しずつ輪郭を取り戻していく。

「ありがとうございます……」

「いいえ。イリシア、僕のこと覚えていない？ エリオットだよ。小さい頃よく遊んでいただろう？」

「……エリ、オット……？」

まだ掠れた声で繰り返す。

エリオット。聞き覚えのある名前だ——そうだ。エリオット様は、小さい頃よくわたし

が遊び相手を務めさせていた、この国の皇子――

「うそ、――……っ」

「つと、動いては駄目だよ、イリシア。ゆっくり解毒しているから、まだ眠気もひどいだろう？」

慌てて膝から退こうと体を動かすと強烈なめまいが襲ってきた。支えるように抱かれて、膝の上に戻される。自分の身体も含めて、信じられないことばかりだ。

シルヴェニア王国、次期皇帝のエリオット様。

この方と離れるために、わたしは国外れの療養所に行ったはずではなかったか。

「エリオット様、申し訳ございません……わたし、わたし――大変、その、ご無礼を」

「分からなかったのも無理はないよ。君が眠ってからはもう三年ほどで……君からしたら、僕に会うのは十年振りになるから」

眉を下げて心配げにこちらを覗き込む顔が美しい。

彫りの深い整った顔立ちに、透き通るような空色の瞳。王家特有の白に近い銀髪は、窓から何層もの光を反射して輝いている。

十年前、可愛らしい少年だった彼がこんなにも美しい青年へ成長したことに、けれど見惚れている場合ではなかった。

「それは、わ、わたしは——エリオット様に近付いては、ならなかった、から」

「うん……そうらしいね。酷いことだよ、僕は“イリシア”たつての願いで、魔法の修業をしに国外へ行った」と聞かされていたんだ。そうでなければこんなに時が経つこともなく会いに行ったのに」

小さなため息と共に、降り注いでいた視線が外される。部屋を見渡すエリオット様に釣られてわたしも周りを見た。

ここはどこなのだろう。一見すると植物園のようだ。

屋根は全て硝子張りで、壁もほとんどが硝子だ。暖かな日差しが降り注いでいて、あちこちに房のような白い花が咲く蔦が這っている。

わたしたちがいるのは庭園の一番奥だろうか。

テラスのような階段を登ったところに大きな天蓋ベッドが置いてあり、エリオット様はそこに腰掛けていて——わたしは、その膝の上にいる。

「ここは君のための場所なんだよ、イリシア」

「わたしの、ための……？」

「君は……王家直属の魔導師の家系で、強い魔力を持っていたのに——力を制御できないからという理由だけで、あんな辺境の療養所まで追い出されてしまったのだろうか？」

そうだ。わたしは生まれつき魔力が強すぎて、制御ができなかった。

幼い頃はまだ微々たるものだったのだが、成長して魔力が増すにつれ、そばにいる者に誰彼構わず影響が出てしまった。もちろん、エリオット様にも。

そうして十四の夏に呪い子だと判断されたわたしは、国外れの療養所に身を置くことになったのだ。

こわごとと頷くと、色素の薄いまつ毛が憂いを帯びて瞬いた。

「自ら、あれを飲んだのだと聞いた時は……本当に、どうしてもっと早く探さなかったのか

と。ひどく自分を責めたよ」

療養所にいたところで、魔力の制御ができることはなかった。

唯一眠っているときだけはその力が抑えられるから、わたしは十八になったその日に、国に何かあった時だけは起こして欲しいと伝え、自ら永遠の深い眠りにつくことの出来る花の蜜——と言えば聞こえはいいが要は毒である——を、コップ一杯飲んだのだった。

「皆にイリシアはどうしたのかと聞いても、いつまで経っても修業から帰って来ないとばかり。痺れを切らして確かめたら、君は修業になんか行つてなくて——小さな療養所の固い木のベッドで、もう眠っていた」

後悔を滲ませた声音にぎゅっと胸が締め付けられる。どう答えたらいいかわからなくて視線を下げて——その時ようやく、自分の格好に気付いた。

わたしは今、肩も背中もかなり見える、ドレスの下着にするような薄いワンピース一枚だけしか身にまといていなかった。

「つちよつと、待つて下さい——エリオット様、わたし、こんな、はしたない格好……っ」
「大丈夫だよ、イリシア。僕しかないのだから、恥ずかしがる必要はないんだよ。彼らは衣服をあまり好まなくてね……ああ、ほら、捕まっついて」

エリオット様に見られているから恥ずかしいのだが——と思っっているうちに、しゅる……と音がして、何かが足に絡まった。ひ、と喉奥で小さな悲鳴が出る。

夢中ではがみつくと、応えるように背を抱かれた。子供にするように頭をぼんぼんと撫でられてようやく、あの頃とは想像もつかないほどの体格の差があるのを感じる。

……けれど、それどころじゃない。

「なっ、に、これ……っ」

「怖がることはないよ。危ないことはしない、ただ君から溢れる魔力を貰いに来ただけの植物だよ」

しゅるしゅるとわたしの肌にやわらかく絡んでいく蔦を見て震える。

魔力を貰いに動いて絡みつく、なんて——そんな植物、聞いたこともなかった。

「君の魔力をどうにか出来ないかと思って、調べた中で……魔力を吸収して育つ植物があると耳にしてね。遠い異国から取り寄せたんだ。凄いだろう？ この植物園にいる子たちはみんな、君が育てたんだよ」

愕然とする。

城の大広間よりも広く見える、この植物園のあちこちに蔦を伸ばしている植物を、すべてわたしが育てただって——？

驚いている合間にも蔦はわたしに絡みつき、肌を撫でていく。理解が追いつかないまま、未知のものに触られる感覚に怖気が走った。

「や……っ嫌です、こんな、エリオット様……！」

「ああ……イリシア、怖がらないで。彼らが君から溢れる魔力を吸収しているうちは、君の魔力がほかの誰かに影響することはないみたいなんだ」

「……影響、しない……？」

「そう。だからね——ここに居れば、君は魔力の制御に悩まされることはない。こうして僕

の膝の上にいたって大丈夫なんだよ、イリシア」

梳くように髪を撫でられる。こちらを見る視線がなんだか愛おしげでどきりとした。

とはいえ戸惑いはまだ消えない。

確かにわたしは、自ら制御できないこの魔力に絶望して眠りについた。けれど、だからといってこんな待遇を望んだわけではない。

（制御することができないのなら、せめて他人に迷惑をかけず生きたかった。国の一大事の時にだけ役に立てれば——と……平和なままなら、死ぬまで眠っていたって良かった）

「でもわたし、それだと、国の……エリオット様の……なんの、役にも……」

「イリシア、大丈夫だよ。これからの君にはとても大事な役割がある」

そつと手を取られる。美しい刺繍の袖に包まれたエリオット様の、細く長い手はきつとりと手袋で包まれているのに、わたしは未だ、肩を出して素肌を晒したままだ。

「役割……？」

「そう。イリシア、君はこれから、僕の妻になるんだ」

「……っ、ま……っ？」

恭しく手の甲に口付けられて言葉を失う。

なんで。どうして、そんな、有り得ない。十年も会っていなかった、こんな出来損ないに。

「約束しただろう？　大きくなったら、結婚しよう——って。お花をあげたの、忘れてしまったかな」

「いえ、それは……忘れる、はずが……」

あれは幾つのときだっただろうか。

本格的な王族の教育が始まる前だから、わたしたちが五つか六つぐらいのときだったと思う。

あの頃のわたしたちは本当に仲が良くて、たびたび二人で裏庭まで抜け出しては泥んこで帰って、お付きの者たちにそれはそれは怒られていたのだった。

“イリシア、イリシア！ おおきくなったら、ぼくのおよめさんになって！”

ある日、一人で裏庭に行ったらしい皇子が、可愛い手作りの白い花束を渡しながらそう言ってきた。

当時のわたしに、彼のお嫁さんになるという意味がわかるはずもない。嬉しい気持ちのまま、うん、なる！ と大きく頷いて、少し泥のついた、けれどとても可愛い花束を受け取ったのだった。

もちろん、そのあと裏庭の花を勝手に摘んでしまった皇子と一緒に大層怒られたのだが——それも含めて、鮮明に覚えている。

療養所の質素な生活でたびたび思い出す、失うことない輝きを持った大切な思い出だった。

「子供のした約束だと思っていた？ 僕の気持ちはあれからひとつも変わっていないよ」
「——……エリオット、さま……」

これこそが夢のようだ。けれど、例え魔力が抑えられたからといってこんな出来損ないのわたしを、王族の者たちや、民が、許すのだろうか。

熱っぽい視線に揺らぐ脳内を、ボーン……と、大きく響く時計の鐘が遮った。

「……この話はまた今度にしようか。イリシア、お薬の時間だよ」

柔らかい笑みと共に取り出された、小瓶に入った液体の色を見て肩が震えた。

——この解毒薬は、選ばなかったはずだ。

わたしが療養所のベッドのそばに置いていた解毒薬は、もっと強く、身体の負担こそ大きいけれど、短時間で解毒が出来るものだ。

「これ、ちが……エリオット様、解毒薬でしたら、わたしが用意していた薬が……っ」

「あれは捨てたよ。一週間も熱が出て、吐き気や……それ以外の副作用も大きいのだろうか？ 僕はイリシアをそんな目に遭わせたくないんだ」

「そんな……でも、これは、その……っ」

エリオット様の持つているそれは、熱や吐き気を催すことなく、効き目も穏やかで、数週間かけてゆっくりと解毒されるが——その分、強い催淫作用があつたはずだ。

慌てるわたしを見たエリオット様が目を細める。緩やかに弧を描く口元が、どこか蠱惑的に見えた。

「知っているよ。イリシア、何も覚えていない？ 君は少し前から、何度もこの薬を飲んでいるはずだけれど」

「え……っ？」

「身体は覚えているかな？ 君は僕の腕の中で、何度もこうやって、薬を飲んでいたんだよ」

小瓶が傾く。エリオット様のわずかに開いた口の中に、液体が流れ込んでいくのをスローモーションのように感じた。

屈み込んだエリオット様が、わたしの顎をそつと取る。

——ふわりとベルガモットの匂いがして、それだけで身体がぴくりとも動かなくなってしまった。

「ん、う……っ！」

ちゅ……っ♡

重なる唇に頭が真っ白になる。流し込まれる薬がいやに甘いことだけを鮮明に感じた。それは確かに飲んだことのあるような味だった。震える身体を柔らかく抑えられ、時間をかけて少しずつ口移しされて、もはや吐き出すことはできずに——こくりと、飲み込む。

「……ふふ。起きていても、上手に飲めたね。いい子」

「っは……、エリオットさま……いけません、次期皇帝のあなたが、こんな事をしては——」
「僕がこうしたいんだ。それに……どんな立場でも、妻の世話をしたり、触れることはいけないことではないだろう?」

どうして。わたしは妻などという器ではないのに。弱々しく首を振っても、優しく頬を包まれ、額へと口付けられるだけだった。

手馴れたような動作を受けて、もともとろくに動かなかった身体がだらんと力を失って

いく。

——数分もしないうちに、わたしはエリオット様の逞しい胸元へ凭れかかることしかできなくなっていました。

「は……ふ……っ、エリオット様……お願いです、わたし、一人に……」

「このまま一人になっても、ろくに発散出来なくてつらいだけだよ。大丈夫、何度か気を遣えばよくなるから——ね、イリシア。僕に任せて」

ぱちん、と。手袋の留め具を外す音が背中響く。ほんの少しの衣擦れでみるみるうちに身体が熱くなってしまった。

何もできないまま、手袋を脱いだエリオット様がわたしの脇腹をなぞる。

「ひ……っ！？♡ あ……だめ、エリオット、さま……っ」

「ああ、子猫みたいに震えて……可愛いイリシア。目を覚ました君に、ずっと触れたかった……」

頼りない絹の布越しに、する……♡ と脇腹から胸の横を辿られる。それだけなのに身体が期待にさざめいて震えてしまっていた。

いくら落ちこぼれとしても、眠る前までずっと、聖女として生きてきたのだ。こんなことは、知らないはずなのに。

「やっぱり身体は覚えているのかな。いつも君は、こうして胸の……おっぱいの横のところ、すりすりって撫でられるだけで、すごく嬉しそうにしていたんだよ……」

「そんな……うそっ、知らな……んんっ♡ やっ、もまない、で……っ」

すりすり……♡ さすさす♡

もにゅ……っ♡

指腹が柔らかく膨らみをなぞり、大した隆起のない胸を揉む。魔力が強くなる一方で、わたしの身体は十四の誕生日を迎えてからほとんど成長が止まってしまっていた。

ずっとこの小さくみすばらしい身体がコンプレックスだったというのに。エリオット様に、見られて……触れられてしまっていたのだろうか。

「ふふ、イリシア、思い出してきた？ 胸を揉むたびに身体を振らせて……やっぱりちゃんと起きているほうが、薬の効きがいいみたいだね」

「あ……っあ、それ……♡ もむの……っだめです、エリオットさまあ……♡」

もにゅ♡ もにゅ♡

すりすりすり……♡

ささやかな膨らみを痛みのないように揉まれては、先端近くをすりすり♡ と撫でさすられる。

もつとちゃんと抵抗しなくてはいけないのに、頭がぼーっとして甘い声しか出ない。

「だめ？ それなら、撫でるだけにしようか。眠っているときの君は、こうやって……先っぽの周りを撫でるだけで、いやらしい吐息を漏らしていたけれど、今はどうかな……」
「そんな、うそ、……っ♡ ふ、うう……っ♡」

くるくる♡ すりすり♡

よく爪の切り揃えられた指先が、わたしの胸の先端周りをくるくるとなぞる。嘘だって

思うのに、言われた通りに甘い息が漏れてしまつて恥ずかしい。

その上、まるで期待するように薄い布地を押し上げて……乳首が、ぴん……っ♡と、勃つてきてしまつていた。

「……素直で可愛いイリシア。ちゃんとして、覚えているみたいだね……？」

「やつ、まつ……あっ！♡♡ あ、だめ、エリ、オットさま♡♡ そこ、こすこすしちゃ……っんうう、……んん……♡♡」

すり♡ すりすり♡

カリカリカリ……♡♡

つんと勃つた乳首を両方とも、布越しに指先で引っ掛けて腰が浮く。恥ずかしい声が出てしまつて、必死に堪えようと唇を噛むと、少し眉を寄せたエリオット様が顔を近づけてきた。

「イリシア。綺麗な唇なのだから、噛んだらいけない……ほら、上を向いて……ん、ちゅ……っ」
「んむっ、う……♡♡ んん、ッ、ふ……っ♡♡」

咎める言葉の合間にもカリカリ♡ と爪先を動かされていてお腹の下が疼く。ただでさえ薬が効いているのに、止まらない愛撫と口付けで頭がどんどん麻痺してきてしまった。気付けばわたしはエリオット様の服に腕を回し、しがみついたまま唇へ吸い付いていた。

「ん……ふふ、自分からちゅう、って吸い付いてきて……キス、気持ちいいんだね。本当に、かわいい……」

「ん、んう……？♡ はふ……うん、ん……っ♡」

ちゅ、ちゅ♡ すりすり♡

こすこすこす♡

何度も角度を変えて唇を吸われ、吸い返ししながら、固くなった乳首を擦られて、へこ♡♡ と腰が揺れる。

（んん、キス、きもちい……♡ 唇ちゅうって吸われるたびに、腰ぞくぞくして……舌同士でこすると、えっちな音が頭いっぱい聞こえて……びりびりしてきて、何も考えら

れない……♡　だめって、言わなきゃいけないのに……もつとちゃんと、さわってほしくなっちゃう……っあ、なに……？)

しゅるしゅる……と、蔦の擦れる音が聞こえる。足に絡みついている蔦は動いていないはずなのに、耳の近くから鳴る音はすぐに肩まで下りてきた。

「ッあ……っ！？　やだ、なに、こわい、エリオット様……っ」

「ん……ああ、大丈夫だよ、イリシア。君の魔力を吸っているからかな、彼らはとても従順で気が利いて……君の欲求を、すぐに見抜いてしまうみたいなんだ」

どういふことかと問う前に、肩に這う蔦がワンピースの肩紐を両方とも引っかけて落としてしまった。緩いサイズのそれは肩からずとんと落ちて——エリオット様の愛撫ではしたなく反応した、わたしの胸元が露になる。

「……！？　や、やだ、エリオット様……みないで、くださ、あっ♡」

「君がこうされたいと思ったのだろう？　恥ずかしがることはないよ、葉がちゃんと効いて

いる証拠だ」

すり……♡

すりすり♡ ぴん♡

薬の効き目が強いのだろうか。どこもかしこも敏感になってしまっていて、肌を直接触れられるだけで背筋が戦慄く。膨らみを辿っていた指先が、悪戯にぴんと勃った乳首を弾いて思わず仰け反った。

「っうう、んっ♡ わ——わたし、こんな、からだじゃ、ッああっ!?!♡」

「ふふ、うん。こういうのも最初はくすぐったかったみたいだね、可愛くイヤイヤしていたんだけど……近頃は嬉しそうに自分から差し出していたよ。ほら、今みたいに背筋を反らして……」

「やつ、ちが、あっ♡ つまんじゃ……っひいん♡ あ、あ、あ……っ♡」

きゅっ♡

すりすり♡ くにくに♡

尖りきった先端を優しくつままれて、糸を縊るようにくにくに♡ と弄られて、鼻にかかった甘い声を止めることができない。

「つままれるの、好きだろう？ 寝ているときの君が特に好きだったのは、こうやってつまんだ乳首の先っぽを、爪先でほじられることだったけど……」

「っひい!?!♡ あっ、あっ、だめ♡ それやだっ、ああっ、うああっ♡」

「ふふ……うん、やっぱり好きみたいだね。大丈夫だよ、このままイリシアが乳首でイけるまで、ずーっとほじってあげるからね……♡」

恐ろしい囁きと共につままれたまま先端をカリカリ♡ されて頭に火花が散る。そこだけでいくなんて、絶対無理なのに。

気付けばひくっ♡ ひくっ♡ と内ももが痙攣していく準備を始めてしまっている。

（おかしい♡ こんなのおかしい♡ そんな……ひとりで、そんなところ♡ 触ったことも、なかったのに……っちょっとくにくに♡ されるだけで、きもちよくて♡ エリオット様の膝、ぎゅって挟んで、おまた……擦りつけちゃうの、やめられないよお……っ♡）

「うう、んっ♡ んう♡ あう、あっ♡」

「ああ……ははっ、イリシア、それすっごくやらしくって可愛い……乳首つままれながら、僕の膝におまたすりすりするの、気持ちいいんだ？」

「やあっ♡ ちが、かって、にい♡ 身体が、うあっ!?!♡ やあ、ひっぱら、ないで……っ♡」

「勝手になっちやうんだろう？ だから手伝ってあげようと思って。ほら、腰浮かせてごらん……君は乳首だけでもちやーんと、イけるはずだよ」

「そんな、むり、っああっ♡ うう、それ、あっ、あゝ……っ♡」

きゅっ♡ くにくに♡

カリカリカリッ♡

ゆるゆると引っ張られるのに釣られて慌てて腰を浮かすと、ご褒美みたいに先端を爪先で弄られてがくと身体が仰け反る。薄い胸を突き出して、先っぽから与えられる快感だけで頭が灼けていく。

こんなはしたない身体ではなかったはずだ。出来損ないだとしても、聖女として国の役

に立つという使命があるのだから、欲は持つまいと——そう思っていたはずなのに。

「考え事してる？ 駄目だよ、イリシア。ちゃんと気持ちよくなれるの、いいことなんだから……ね。もっと、おっぱいの先っぽに集中してごらん？ 今触られてるところ、ほら、ここだよ……」

「ひいんっ♡ うう、エリオット、さまぁ♡ や、さきっぱ……ぱっかり、っひ、あ、あ……っ♡」

「うんうん、今イリシアはね、気持ちよくてかたーくなくなった乳首の先っぽばかり、触られちゃってるんだよ。ふふ……かわいい、は、はっ♡ って、ワンちゃんみたいに息、短くなってきたね……♡」

カリカリ♡ くりくり♡

くにくにくに……♡

ぐっと喉を詰まらせているとすぐに見抜かれて、優しく諭されながらつまむ指の力を強められていよいよ余裕がなくなっていく。断続的に呼吸を繰り返しながら、エリオット様の膝へ後ろ手に手をつき、ぐっと背が伸びていく。

「うあ、あ、あつだめ、エリ……ッ、もお、ああっ♡だめ、わたし……っ♡」

「だめじゃないだろう？ 大丈夫だよ、イリシア、このまま僕の指でさきつぽカリカリされただけでイっちゃうところ、見せて……？」

追い上げるように指先を早められてかくかくと腰が揺れていく。

気持ちいいでいっぱい、自分がどうなっているかよくわからない。お腹がひくついて耐えられない。もうだめ、きもちいい、イきたい、イク、イっちゃう……♡

「あ、あ、あ♡ あ、だめイク、ちくび……でえ♡ も、イクう♡ イっ、ぢゃ……っんんん♡♡♡」

びくんっ!!♡♡

びくびくっ♡ がくがくがく……っ♡

全身に電流が走ったみたいだ。ただ乳首を捏ねられているだけで、わたしは……思い切り、腰を揺らして、イってしまった♡

いくら薬のせいだとしても、こんなところだけでイけるなんて——そう思った瞬間、またくにゆくにゅ♡ と固いままの乳首を弄られて身体が逃げを打つ。

「上手にイけたね、イリシア。ちゃんと先っぽだけでアクメできて偉かったよ……まあ、寝てる君は何度もここだけでイっていたから、当たり前かもしれないけど……♡」

「ひいん……っ♡ そんな、も、ダメ……っいじらないで、もおだめ、ああっ♡」

細めた視線が刺さってきてなぜだか身体がぶるりと震える。

激しくイったはずなのに、お腹の熱がまだ収まっていなくて恐ろしい。

悪戯っぽく親指の腹で敏感なそこを撫でられて、慌てて腰を引いたのに、抑えるように薦が腰に絡みついてきて塞がれてしまった。

「あっ？ つや、やだ、はなして、」

「ふふ、彼らはもう分かっているみたいだよ。君に似て賢いんだね……イリシア、まだ身体、収まってないんだろう？」

「——そんな、こと……っ」

「恥ずかしくて素直になれない？　イリシアのここは、こんなに濡れて物欲しげにしているのね」

ぴと♡　　もにゅ……っ♡

身体を振るほどに絡む蔦が食い込んで逃げる事ができないまま、エリオット様の手が後ろから這って、わたしの……おまんこを、捕まえてしまった。

常人よりも大きな手が先ほどの愛撫で濡れきったおまんこをなぞり、柔らかく揉む。それだけでまるで期待するようにナカがひくん♡　と揺れて、喉が震えた。

「ひっ……♡　あ……わ、わたし……そこも、エリオット様に、さ——さわ、られて……っ？」
「うん？　ああ、心配しないで。君は療養所でも実に敬虔な聖女だったと聞いているからね。経験はなかったのだろう？」

すりすり♡　くちゅ♡

下着を貫通して滴りかけた愛液がエリオット様の指に掬われて恥ずかしい水音を鳴らす。エリオット様の言う通り、わたしは今まで誰にも身体を許したことはないし、許す予定

もなかった。

だからこんな風に触れられるなんて、考えたこともない。ましてや、エリオット様の長い指で——なんて。

「君のここ、とても小さいし……僕の手は、大きめだから。ナカはまだつらいかもしれない
と思つてね。触るのは、ここだけにしていたんだ」

「へ……つあぁッ！？♡ やつ、まって、なに、うあぁっ♡ そこ、だけって、あううっ♡」

カリッ♡ カリカリ♡

ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

入口の上にある取っ掛かりをエリオット様の指先が引っ掻く。それだけで先ほどよりも
ずっと強い、直接的にお腹に響く快感を覚えて声がひしゃげた。

ナカとか外とかそういう問題ではないのだけれど、それを抗議することもできないほど、
気持ちよくて何も言えない。

「ほら、ここ……好きだろう？ ナカはつらくとも、君のここ——クリトリスなら、僕の手

でたっぷり可愛がつてあげられる……」

「ひいんっ♡ ブッ♡ エリオットさまッ、これ……これ、っああ♡ きもちよすぎて♡
まって、まっ、いっかい、とめ——んああっ♡♡」

くちゅ♡ すりすり♡

カシカシカシ……♡

ぬるついた布越しに短い爪先で引っ搔かれてたまらずに声が引き攣る。達したばかりの、
まだ燻った身体が嬉しそうにへこ♡ へこ♡ と揺れてしまう。

「そんなに腰を振らなくても、たくさん触つてあげるよ、イリシア。ここもね、最初は控え
めに触つていたんだけど、君があんまりにも喜ぶから——ほら、わかるかな」

「ひい、あつ、あんっ!?!♡ まっ……なに、やつあう、う~~~~……っ♡♡」

「ああ、はは、すごいぬるぬる……こうやって、ね? 皮を引っ張つてシコシコできるくら
い、大きくなっただよ……♡」

ぐいっ♡

シコシコ♡　ちゅこちゅこちゅこっ♡

わけもわからないまま下着の中に手を入れられてしまった。直接クリトリスの皮を引っ張り、露出したそこをつままれてひどい声が出る。

（あ、あ♡　そんな、ダメなのに♡　そんなとこ大きくするの、絶対ダメなのに♡　クリ、指で扱かれるのきもちよくて、あたまバカになっちゃう♡　勝手に腰振って欲しがりアピールしちゃう♡　うう、だめ、エリオットさまの指に♡　くり、しこしこしてもらうの、きもちいいよお……っ♡♡♡）

「は、ひっ♡　わ、わたひ♡　こんな、おかひ……っああダメ、きもちい、あっ、あゝっ♡」

「あは……目、とろんとしちゃったね。可愛いイリシア……大丈夫、これは全部、君が僕のお嫁さんになるための準備だから。怖がらなくていいんだよ、気持ちいいことだけ、感じて……？」

甘やかに囁かれながらもずっとちゅこちゅこ♡　と指を動かされて訳が分からない。

発情しきったおまんこから愛液が伝い流れて手を汚してしまっているのに、エリオット様はずっと目を細めて、嬉しそうにわたしを見つめているばかりだ。

「えり、エリオットさまあ♡ やつ、こわ——こわい、わたひ、ああうつ♡ あ♡」

「うん、こわい？ ごめんね、イリシア、痛かったかな……？」

「ちがつ……こん、こんなのお♡ きもち、よすぎて……くせに、なつぢやうう、んあつ！？」
♡ あっあっ♡ だめ、だめ、さきつぽやだあ♡♡

こりゅこりゅこりゅ♡

つんつん♡ くにくにくにくに♡

大きめの吐息と共に、優しく抜いていた指が激しさを増す。あまりの快感に涙を浮かべながらエリオット様に縋りつくと、わたしを見つめる視線がどこか仄暗さを秘めていて背筋が粟立った。

「……イリシアは僕のお嫁さんになるんだから、癖になってもいいんだよ。いつでも、何回でも、イリシアが欲しがるだけ僕がおまんこ弄ってあげるから……ね？」

「ひっ♡ ああつだめ♡ そ、そんなのお、およめさんじゃ、ないい♡」

「ううん、イリシア。どんなのでも君は僕のお嫁さんだよ。だから——ね、安心して、クリ
ちゅこちゅこされながら、何回もイき狂っていいんだよ……♡」

（やだやだ♡ そんなの絶対おかしい♡ 癖になって、毎日クリいじりおねだりするようにな
なっちゃうようなお嫁さんなんて絶対だめ、なのに♡ じいっと見つめられながらちゅこ
ちゅこされると、もう♡ 腰振っていくことしか、考えられなくなっちゃう……♡♡）

へこへこ♡ と犬のように腰を揺らすうちに、また絶頂感が忍び寄ってくる。乳首をい
じられたときよりも輪郭のはっきりとしたそれを追いかけてクリトリスをエリオット様の
指腹へと擦り付けていると、こっん、と熱い額を合わされた。

「あ、あ、あ……♡ つ♡ えり、エリオット、さま♡ わたひ、らめ……らめ、なのにつ、う
うっ♡」

「うん……？ ダメじゃないよ、イリシア。気持ちいいんだろう？」

「……つきもち、よくてえ♡ つあ、ううっ、んん♡ また、イきそ、で……♡」

「ふふ……教えてくれるの、可愛い。たくさん気持ちよくなれて偉いね……いいよ、じゃあ、こっち向いて？」

快感でぼんやりする頭の中に、囁き声が木霊する。

誘うように鼻先を擦りつけられて、震えながら上を向くと——場違いなほど甘やかなキスが、降ってきた。

「んっ……ふ、う……っん！？♡ つは、らめ、んうう……っ♡」

「は、ん……僕とキスしながら、イって……？ イリシア……」

ちゅ、ちゅ♡ と何度も唇を重ねられて頭が真っ白になっていく。

先ほどの口移しとは訳が違う。これはなんの理由もない、ただ甘ったるいだけのキスで——だからこそ一層身体が昂ってしまふ。

短くなる吐息で限界が近いことをすぐ悟られて、指の動きを早められた。

こりこり♡ カリカリカリ♡

ちゅこちゅこちゅこちゅこ♡

「んむ……つふうつ、んんっ♡ あ、っあいぐ、またイク♡ わたひ、あつ……なに、っ
ああ♡ らめ、イっちゃ、うづつ、くくくっ♡」

びくびくっ♡ びくんっ♡

ぷしっ♡ ぴしゅっ♡ ぷしやあああっ♡♡

あ、出ちゃう、と思った瞬間にはもう遅かった。わたしは何度も身体を震わせ、勢い良く何かを吹き出しながら、イってしまっていた……♡

「ああ、すごいな、イリシア……潮まで吹いちゃったんだ。僕とキスしながらイクの、そんなに気持ちよかった？」

「は、あつ、も——申し訳ございません、わたし、こんな、そ……粗相を、」

「ああ、これは潮吹きって言って……イリシアがすごく気持ちよくなったときに出るものだから、粗相ではないよ。だから大丈夫、ね」

謝りながらも未だにちよろろ……♡ と出てしまつて、羞恥にぎゅつと目を瞑ると、安心させるように頬を撫でられる。激しく達したばかりの身体はそれだけの刺激も敏感に受け取つてぶるりと震えた。

そんなわたしを、エリオット様は少し伏せ気味の瞳で見つめていた。

「潮吹きまでしてくれたのは初めてだな……やっぱり起きると感じ方も違うのかもしれない。イリシア、ごめんね、本当はずっと抱きしめていたんだけど……少しだけ身体、起こしてもらえるかな？」

「へ……は、はいっ……ひやつ？」

少し身体に力を入れるといとも簡単に持ち上げられて情けない悲鳴が出た。絡む薦をゆつくりと外され、ベッドの縁に座らされる。

薦にわたしが出してしまった潮が水滴となつて溜まつていて、恥ずかしさが募る。

——けれどそれも、一度立ち上がつて天蓋へと絡む薦を取るエリオット様のお姿を見たことで、霧散していつてしまった。

「……そんな驚いた顔をして、どうしたの？　イリシア。僕の顔、何かついてるかな」

「い、いえそんなっ……ただ、立派に、なられたと……」

十年前、最後に会ったときのエリオット様は、わたしとさほど変わらない背丈の少年だった。王家の一族も現皇帝も、決して背が低いわけではないが、ここまで飛び抜けて高い者はいなかったはずだ。

それなのに、今この場に立つエリオット様の背丈は――

（……わたしの、せいだ……）

――触れられているうちに薄々感じていた。やはり、影響してしまっていたのだ。

わたしの適性魔法は、対象の成長を促したり強化したりするものだ。成長の出方は人によって様々だけれど、恐らくエリオット様の場合は身体に影響を及ぼし――本来の背丈よりも高く、育ってしまったのだろう。

「ああ、背が大きくなっていて驚いたのかな。この身体はきつと君からの祝福なんだろう

ね」

「……祝福、なんかじゃ……、……え、エリオット様？」

「イリシア。足、開いて？」

なんでもないように言うエリオット様に申し訳が立たず俯きかけたところで、突然目の前に跪かれた。

こちらを見上げながら、柔和な笑みを浮かべる端正な顔に愕然とする。

「なっ、なっ、なりません——！ 皇子が、そんな、そのような、ことを」

「皇子じゃなくて、エリオットって呼んで欲しいな。ちよつと確認したいだけなんだ、ほら、下着も濡れてしまっただろうから……脱ごうか、イリシア」

「へっ？ まッ、ちよ、ああつだめえ……！」

にこにこ笑顔のまま、ワンピースの中に手を入れられてしまった。抵抗しようとするものの、こんな大きな体躯に叶うはずもない。あっさりと濡れた下着を奪われて足を開かせられ——先ほど散々罵られた秘所を、見られてしまった。

「ふふ……まだひくひくしてるね、イリシアの小さなおまんこ……」

「ううっ、み、みないで……っ」

「だーめ、あの薬も弱くはないんだから、経過を見なきゃ。副作用はだいぶ抜けたみたいだから……」

耐え難いほど恥ずかしい。こんな、いったばかりのおまんこ、エリオット様に、まじまじと……見られてしまうなんて。

濡れた媚肉を、指でくいと引っ張られて、閉じた秘唇がくちゅっ♡と淫猥な音を鳴らす。

「あうっ!?!♡ も、抜けた、抜けましたから……っ!」

「ふふ、うん、今日はもうしないよ。でも……イリシアのおまんこ、もうちょつとがんばれそうだね。次はここ、たくさん舐めてあげる。可愛いクリにいっぱいキスして、舌でナカずぼずぼして……僕のお嫁さんになる準備、しようね?」

「そんな、……だめ、え……♡」

ふるふると首を振るのに、息がかかるほどの距離で囁かれて否が応でも意識してしまう。いつからこんな身体にされてしまったのだろうか。——いや、もともと、わたしには……こんな素質が、あったのだろうか。

どちらにせよ、こんな役にも立てない淫らな身体でエリオット様の妻が務まるはずがない。

「そんなに震えないで？　何も怖いことはないんだから。君はこの庭園で、ただ僕に愛されていたらいいんだよ」

甘い言葉を上手く受け止められなくて俯いてしまう。エリオット様はしばらくそんなわたしを見つめたあと、そっと身体を抱いて、ベッドに横たわらせてくれた。

ふらりと世界が揺れる。細い針で刺されるような頭痛を覚え、息を吐いて目を閉じた。

「……えり、おっと、さま……ごめ、なさ……わたし、なんだか、頭が……」

「いいんだよ。まだ解毒しきっていないからね、あまり長く起きてもいられないはずだよ。

着替えを持ってくるから、ゆっくり休んでいて」

「そん、な、……だい、じょうぶ……」

揺らぐ頭では、首を振ることすらも難しい。

ベッドから立ち上がり、遠ざかるエリオット様の気配をうつすらと感じながら目を閉じていると……じきにカチャ、と小さな金属音が響いた。

その時のわたしはまだ、知る由もない。

その小さな金属音こそが——わたしを閉じ込める、鍵の音だということを。